

34. 小学校の総合学習時間を活用したデザイン教育とまちづくりの連携の可能性に関する考察

－ 宮崎県日向市立富高小学校における「日向市活性化塾」を題材として －

Consideration of linkage between integrated study in elementary schools and city vitalization

－ Based on "Hyuga-city Kasseika Juku" of Tomitaka Elementary School －

辻 喜彦*, 出口 近士**, 吉武 哲信***
YOSHIHIKO TSUJI*, CHIKASHI DEGUCHI**, TETSUNOBU YOSHITAKE***

This paper aims at drawing the characteristics of "Hyuga-city Kasseika Juku", held in the integrated study period (Sogo Gakushu Jikan) at Tomitaka Elementary School, at analyzing evaluation by the pupils and the relevant people, and at obtaining some useful information for city vitalization. In the classes, the pupils were required to design and make wooden street-stalls, 'Yume-Yatai, and to use them in events in the central city.

Analyses of questionnaire after the study reveal that the pupils develop the sense of cooperation and show interests in their town. Based on the analysis, it can be said that the study process and the growth of the pupils' consciousness are very similar to the process of city vitalization. That is, this kind of education process promote city vitalization.

Keywords: Integrated Studies, Pupils, Community Design Learning, Collaboration
総合的な学習の時間、小学生、まちづくり学習、協働

1 研究の背景と目的

まちづくりを進めていく上で、計画段階から市民との連携によって事業を展開し、エンドユーザーである市民が愛着と誇りを持って事業に参画することが大きなテーマとなっている。その方法としてワークショップや意見交換会、勉強会等が全国で活発に取り組まれている^{1),2)}。このような中で梶島³⁾、中川⁴⁾、倉原⁵⁾らは、まちづくりを次世代へ繋げていくために、その担い手となる子どもたちが街に関心を持つことが大切であり、まちづくり学習がそのための契機のひとつとして重要な役割を果たすことを明らかにしている。

一方、2002年度から施行された「総合的な学習の時間(以下、総合学習時間と記す)」を活用したまちづくり学習として、さまざまな地域活動に接する機会も増えてきた。しかしながら、まちづくり学習が実際のまちづくり事業や地域産業と直接連携する機会は少なく⁷⁾、学校教育とまちづくり教育の効果の双方を高めるためには、実際のまちづくりと連携した学習内容やプロセスを明確化し、またその成果の評価を行うことが必要である。

以上の認識から、本研究は、宮崎県日向市において総合学習時間を利用したまちづくり教育として実施された「日向市活性化塾」の取り組みを取り上げ、以下の点に着目して学校教育とまちづくりの連携の可能性を検討するものである。

- 1) まちづくり授業全体の目的と、学習プログラムおよび各授業の意図と内容の整理
- 2) 授業の途中プロセス、および授業終了後の児童たちの成長の把握および関係者の意識変化
- 3) デザイン・モノづくり教育とまちづくりとの連携の可能性の検討

なお本稿の第一筆者は、コンサルタントとして本授業の企画立案および実施支援に携わった。

2 調査・分析の枠組み

本研究で分析に用いる資料は以下の通りである。

- (1) 「日向市活性化塾」を主催した宮崎県土木部都市計画課が授業終了後に作成した記録報告書、冊子^{8),9)}
- (2) 記録報告書、冊子作成に際して、授業主体の行為や発話を集めた議事録やメモ
- (3) 講師が運営するホームページに掲載された授業記録写真、コメント^{10),11)}
- (4) 授業終了後(2005年2月)に、小学校が児童から収集した感想文(配布91名、回収率93.4%)
- (5) 表-1に示す授業終了後(2005年3月)に小学校が行った児童保護者へのアンケート調査(配布91名、回収率76.9%)および自由感想文(配布91名、回収率42.9%)
- (6) 授業終了後に宮崎県が教員(小学校校長1人および担当教員3人)へ依頼した感想文
- (7) 授業終了後に関係者(講師3人、県担当職員2人、市担当職員2人、児童保護者1人、地元関係者2人)に行ったヒアリング
- (8) その他、授業終了後に関係者によって記述された本授業に関する記事等^{12),13)}

上記を第1次データとして、3章では、1) 学習プロセスを時系列に整理し、各ステージの学習内容と学習の狙いを明らかにする。次いで4章では、2) 実施後の評価として、児童による自己評価と外部評価(保護者、講師、教師、地元関係者)を分析し、評価の内容が「授業開始」「授業途中」「授業終了後」の時系列の中でどのように変化したかを把握する。この際2000年12月教育課程審議会答申¹¹⁾に設定されている「総合学習時間で育成する力(評価観点)」に基づき「問題を解決する力」「学び方・考え方」「主体的・創造的な態度」「自己の生き方」を評価軸として考察する。

*正会員 宮崎大学大学院農学工学総合研究科 博士課程(University of Miyazaki)

**正会員 宮崎大学工学部土木環境工学科(University of Miyazaki)

***正会員 宮崎大学工学部土木環境工学科(University of Miyazaki)

表-1 児童保護者へのアンケート調査

設問-1	「活性化塾を開催してみたの感想」
	(すごく良かった・良かった・何も感じなかった・少し工夫が必要)
設問-2	「次年度は「日向市活性化塾」をどうするべきか」
	(ぜひ開催すべき・改善して行く・どちらでも良い・しなくてもよい)
自由感想文	
	(これまでの学習を通じての感想、発表会を見ての感想、日向市活性化塾についての感想、親から見て子どもの成長を感じる点など)

3 研究対象の概要

(1) 日向市におけるまちづくり事業の概要

日向市では、1996年より中心市街地の魅力とにぎわい再生を図るために、官民協働のまちづくりを基本理念とし、JR日豊本線日向市駅連続立体交差事業(宮崎県)・日向市駅周辺地区土地区画整理事業(日向市)・特定商業集積整備事業(民間)の一体的整備に連携して取り組んでいる。また、宮崎県は2001年以降、生産量の連続日本一を誇る杉生産地であり、林業の活性化は地域の活性化にも繋がるため、県域全体で木材の利用拡大を図っているところである。そのため日向市でも「木の香りあふれるまちづくり」をテーマとし、まちづくりが進められている¹⁵⁾。

(2) 「日向市活性化塾」の概要

(I) 実施の経緯とねらい

日向市立富高小学校では、「日向市活性化塾」開催以前の2002年度に篠原修教授(現政策研究大学院大学)、内藤廣教授(東京大学)らによる「まちづくり(次の世代へ繋ぐもの)」と題して、児童たちが将来の街のイメージを考え、模型を製作する課外授業を開催した。本授業は、地元新聞2紙の記事でまちづくり学習の新しい取り組みとして取り上げられ、地域に大きな反響を呼んだ。一方、まちづくり事業も2002年から鉄道高架工事に着手し、街が大きく変貌する段階となっていた。

これらの経緯を踏まえ、宮崎県や日向市の都市計画関係者は、将来の街を担う次世代層の子供たちに駅周辺のまちづくりに関心を持ってもらうことを考えた。一方、富高小学校の関係者は、児童自らが街に対して欲しい店舗や利用客のことを考えて、夢を描き、それをカタチにデザインし、モノに作りあげ、その夢を実現するというプロセスを体験することによって成長することを期待した。また、まちづくりに関与するプランナーやデザイナーらは、児童たちから新鮮な発想を逆に返してもらうことを期待していた。このような背景から以下に示すような「日向市活性化塾」が企画され、小学校の総合学習時間の枠組みを活用することとなった。

(II) 「日向市活性化塾」

「日向市活性化塾」の概要を以下に整理する。

開催期間：2004年10月～2005年1月(約4ヶ月・40時間)

単位時間数：40時間(総合学習時間30時間+5時間、国語2時間、図画工作3時間)

対象児童：日向市立富高小学校6年生3クラス(児童91人)

活動テーマ：「日向市活性化塾(移動式夢空間)」

授業主催者等：主催者(企画関係者)は宮崎県土木部都市計画課・日向市市街地整備課、富高小学校で、後援(運営関係者)

は日向木の芽会、地元職方である^{8),9)}。講師は、日向市まちづくり事業において、杉材を利活用したストリートファニチャー(街路灯、パーゴラ、ベンチ等)のデザイン・製作を行った1名を含むインダストリアル・デザイナー3名⁹⁾である。

(3) 「日向市活性化塾(移動式夢空間)」

授業の企画に当たり主催者等は、児童たちが地域のまちづくりに関心を持ち、街の抱える問題点を把握し、より良い楽しい街にしていけるためには、どのようにすべきかを児童たちが発想することが重要と考えた。このため「学習素材」として日向・入郷地域の地場産業のシンボルである「杉材」を取り上げ、次の課題を提示した。

■課題テーマ：杉でつくる「移動式夢空間」

駅前空間や祭り、イベントなどで、自分たちと街の人たちが一緒に楽しくふれあえる「屋台」を考え、創ってみよう。

■課題条件：

- (1) 材料は日向産の杉材を使う。
- (2) 「屋台」には自分たちの想いや夢を込めるとともに街の将来や子どもからお年寄りのことまで含めて考える。
- (3) 長くみんなに愛され、大事に使えるものにする。
- (4) 大きさは、概ね幅1m、長さ4m、高さ2m以内にする。
- (5) 車輪で移動できる(車輪は既製品を使用する)。
- (6) 最終的に実物の「屋台」をみんなで作り、使う。

実際の授業プログラムとその狙いを表-2に示すとともに、以下に各授業の概要を記す。

第1回授業「準備学習1・授業説明、まちの話」

- ・県と市の担当職員が、中心市街地の抱えている問題点や街の将来像についてスライドや模型を使って説明した。
- ・講師からの手紙(課題発表)を紹介した。

第2回授業「準備学習2・杉の現場見学(まちかど調査)」

- ・杉山、木材市場、製材所、サンドーム日向(構造材に杉を使用)を見学し、木材関係者から杉材と林業の現状について説明を受けた後、街なかの問題点についての現地調査を行った。

第3回授業「講義(課題発表)＋実習1」

- ・講師自己紹介、講師からの課題を説明した。
- ・体育館で3クラス5グループ計15のグループに分かれアイデアを出しあい、それを絵や文章にまとめて発表した。

第4回授業「実習2・模型製作」

- ・杉材(日向木の芽会の協力、提供)により1/10スケールの模型をグループごとに製作した。
- ・授業時間内では間に合わないため、児童たちは自主的に昼休み時間などを利用して模型製作を継続した。

第5回授業「実習3・プレゼンテーション」

- ・グループ案の発表、さらにグループ案をクラス案にまとめ、クラス案を決定し、設計図を発表した。
- ・実物製作のためグループ案で出されたアイデアをクラス案としてまとめて、プレゼンテーションした。
- ・クラス案を受けて、専門家であるデザイナー講師が各々の屋台製作のための設計を行い、スタッフの協力により1/10スケールの最終形確認模型を製作した。

第6回授業「実習4・実物製作1」

表-2 「日向市活性化塾」プログラムと学習のねらい

	学習プログラム	学習のねらいと内容
準備学習	第1回授業 (2004年10月5日)	「準備学習1」(日向の街を考える) ・授業の進め方説明、まちづくりの話
	第2回授業 (2004年10月6日)	「準備学習2」(日向の街を考える) ・まちかど調査
模型製作	第3回授業 (2004年10月15日)	「講義(課題発表)」(夢を描いてみる) 「実習1」グループごとの話し合い、意見出し、グループ案のまとめ発表
	第4回授業 (2004年10月22日)	「実習2」(夢をカタチにしよう) 模型製作・
	第5回授業 (2004年11月12日)	「実習3」(手を働かせて夢を実現) 各グループ模型案発表、グループ案をクラス案にまとめたクラス案決定、設計図発表
実物製作	第6回授業 (2004年12月9日)	「実習4」(みんなの夢をまとめよう) クラス案模型プレゼンテーション、実物製作1・フレーム作り、床張り
	第7回授業 (2005年1月13日)	「実習5」(夢が実現したよ！) 実物製作2・屋台最終組立て 発表会の企画案発表とディスカッション
企画	第8回授業 (2005年1月28日)	「発表会」(夢を思い出に！) 下級生、保護者、市民を招待し、屋台利用の実践
発表	卒業後1 (2005年3月31日)	「日向市への引き継ぎ式」
	卒業後2 (2005年10月25日)	「グッドデザイン賞(新領域デザイン部門)「移動式夢空間」受賞
	卒業後3 (2005年12月4日)	「グッドデザイン賞受賞伝達式・塩見橋手摺りパネルイベント」卒業生88名参加
	卒業後4 (2006年12月17日)	「新日向市駅開業イベント」 卒業生20名参加

- ・クラス案模型のプレゼンテーション(デザイナー講師によって製作された最終確認用模型を児童たちに披露した)。
- ・実物の製作: 基本的な骨組み組み立てを作業し、底板裏側に製作記念に各自の名前と将来の夢などを書いて打ち付けた。
- ・地元職方による細部製作期間中、講師と児童はブログ¹⁰⁾や電子メール等を活用し、進捗状況の確認やアドバイスなど交流を深めた。

第7回授業「実習5・実物製作2・発表会の準備」

- ・屋台最終組立て、仕上げ(側板の釘打ちやヤスリがけ)。
- ・下準備(地元職方による最終的な製作)。
- ・発表会企画案発表とディスカッション(最終日の発表会でのイベントアイデアを各クラスの代表者が発表した)。

6年1組のテーマ「創」の空間・トレジャーボックス

杉を使った栗、キーホルダーなどをお客さん自身に作ってもらう参加型の工房(お年寄りも一緒に楽しめるお店)。

6年2組のテーマ「遊」の空間・動くレインボーランド

発表会のチケットや杉グッズの販売工房(総合案内所)。

6年3組のテーマ「学」の空間・夢の図書館

移動図書館、ゲーム、手品、紙芝居(小学生の遊び場)。

- ・イベントのチケットは、折り紙とし買った人に折鶴を折ってもらい、宮崎県産の杉材で作った商品と引き換えるというアイデアが採用された。さらにこの折鶴を新潟県中越地震の被災者の方へのお見舞いに送るといった発想が生まれた。

第8回授業「発表会」(屋台の使い方の実践)

- ・最終日は午前中に1年生を招いて予行練習し、午後は保護者や市民を招待し、店開き発表会となった(写真-1)。
- ・発表後、講師から全児童に「修了証」を贈呈した。

「日向市活性化塾」終了後

児童たちの製作した屋台3台(「創」、「遊」、「学」)は、日向

表-3 「活性化塾」終了後の「屋台」利活用状況

貸出し年月日	屋台の利活用目的	創	遊	学
2005. 2. 5	欽ちゃん球団「新」ホーム「創」歓迎式	○	○	○
2005. 6. 4~8. 6	土曜夜市(※毎土曜)	○	○	○
2005. 6. 25	七夕まつり	○	○	○
2005. 8. 24~27	2005年度グッドデザイン賞(東京ビッグサイト)	○	-	-
2005. 9. 3	建築士全国大会	-	○	-
2005. 9. 17~18	木と暮らしのふれあい展(東京木場公園)	○	-	-
2005. 10. 29	まちなかいロウィン	○	○	○
2005. 11. 12	杉コレクション2005(宮崎市)	-	○	○
2005. 11. 13	街区周年祭	-	-	○
2006. 7. 1	七夕まつり	○	○	○
2006. 9. 9~10	十五夜まつり	○	○	○
2006. 10. 28	まちなかいロウィン	○	○	○
2006. 12. 17	新規開業イベント	○	○	○
2007. 3. 8	NHK福岡生出演	-	-	○
2007. 4. 27-5. 7	日向地域情報センターでの物産販売	○	○	○



写真-1 「日向活性化塾」発表会の様子

市に寄贈された。その後、表-3に示すように、イベントや祭り開催時には、市民からの申し出に応じて貸し出し、多様な利活用が図られている。

4 「日向活性化塾」の評価

(1) 児童による「活性化塾」の評価(感想)

授業終了後、児童に体験の感想文を依頼し、91人中85人の提出を得た。これらの感想内容について以下に分析する。まず、授業当初の感想の共通点を表4に示す。授業開始前および開始直後の段階では、自己の内面に向き合っていた児童が少なくない。また、初めて接する講師陣や授業内容に不安感を持っていたことが伺える。

表5と表6は、授業終了後に関し、「活性化塾」で学んだこと、成長したことや、その後についての感想をまとめたものである。表5に示すように、「杉についての知識(生産量、植林、匂い、温かみ、価格等)を学んだ」と答えた児童が29人あり、本授業において日向の街のことや杉山、木材の使い方や感触などに触れることで知識を得たことがわかる。最も多い感想は、「協力することの大切さを学んだ」の34人であり、仲間との協力関係の重要性を学んでいる。これは、模型製作段階・実物製作段階においては、グループ内での意見交換・合意形成に基づいて具体的なカタチを作り出すことが要求されるからである。換言すれば、まちづくりにおいて必要な合意形成の練習を行えたとも言えよう。また、「感謝の心を持つようになった」旨の回答も多く、「活性化塾」を通じて、児童

表-4 授業の最初に感じたこと

a	「本当に出来るかちょっと心配だった」	6人	7.0%
b	「初めは適当にやれば良いと思っていた」	3人	3.5%
c	「以前は人に感謝したことなどなかった」	1人	1.1%

表-5 「活性化塾」で学んだこと

a	「協力することの大切さを学んだ」	34人	40.0%
b	「杉についての知識(生産量、植林、匂い、温かみ、価格等)を学んだ」	29人	34.1%
c	「感謝の心を持つようになった(うち職方への感謝(14人))」	21人	24.7%
d	「モノを大切にしなければいけないと思った」	8人	9.4%
e	「人の話を聞いてメモがとれるようになった」	5人	5.9%
f	「日向の街のことを学んだ」	3人	3.5%
g	「優しさが大切なことだと学んだ」	3人	3.5%
h	「資料は良く読まなければいけないと思った」	3人	3.5%
i	「感動した」	2人	2.3%
j	「頑張りが大事だと思った」	2人	2.3%

表-6 自分で成長したと思うこと

a	「大工道具が使えるようになった」	13人	15.3%
b	「自分から意見が言えるようになった」	6人	7.0%
c	「自分から進んで行動できるようになった」	3人	3.5%

表-7 これらのことについて

a	「街で屋台を実際に使えて楽しかった」	10人	11.8%
b	「日向の街が活性化するのが楽しみ」	3人	3.5%
c	「この授業のことは一生忘れないと思う」	3人	3.5%
d	「屋台がもっと街の中で役に立つとうれしい」	2人	2.3%
e	「また課外授業を受けてみたい」	2人	2.3%

たちの心は外方向(他者)との関係に向き始めたと言えよう。また「優しさが大切なことだと学んだ(3人)」や「人の話を聞いてメモがとれるようになった(5人)」もあり、ここでも意見交換・合意形成の基本を学習できたと考えられる。

表-7に将来に関する意見・感想を示しているが、「街で屋台を実際に使えて楽しかった」児童が多く、自分たちが製作した屋台がまちづくりに活かすことができたという実践の喜びを見出している。また、「屋台がもっと街で役に立つとうれしい」「日向の街が活性化するのが楽しみ」と答えた児童もおり、児童の視線が「街」に向けられたことは評価できよう。

なお、自分たちが創り出した屋台をどのように使うかというソフト面の企画力については、児童の視点からの自由かつ柔軟な発想が活かされ、表-3に示すような多様な利活用につながっている。

(2) 保護者からの「活性化塾」の評価

表-8に、児童保護者に対する授業終了後のアンケート調査結果(91世帯に対して70票の回収)を示す。表より、9割近くがこの授業を支持し、継続的な開催を望んでいる。通常の児童と教師の関係とは異なった教育形態である「活性化塾」が保護者からも支持された授業であったことがわかる。

表-9は保護者の感想文をまとめたものである。この表から、児童たちと同様に、初期段階では不安感や戸惑いが多かったものの、授業の経過とともに家庭内での話題となり、生き生きとした児童たちとの会話を通じて授業の目的が理解されるようになったことがわかる。また、発表会での児童たちの成長した姿に接することで、保護者・親としての安心感や主催者への信頼関係が生まれたことがわかる。

(3) 教師からみた「活性化塾」の評価

紙面の都合上、表には示さないが、教師に対するヒアリン

表-8 富高小学校保護者アンケート調査集計結果

設問-1 課外授業を開催した感想			
a	すごく良かった	45人	64.3%
b	良かった	24人	34.3%
c	何も感じなかった	1人	1.4%
d	もう少し工夫を	0人	0
設問-2 次年度はどうするべきか			
a	ぜひ開催してほしい	49人	70.0%
b	改善して開催してほしい	13人	
c	どちらでもない	6人	8.6%
d		18.6%	70.0%
			2.8%

表-9 保護者の共通する感想・意見と心情の変化

授業経過中での感想	<授業開始の時点での印象> ・最初はどこまで出来るか不安で戸惑った(2人) ・最初は理解出来なかった(2人) ・授業がカットされた事が不安だったが、担任教師の熱心さが伝わった(1人)	不安・心配
	<授業途中の時点での印象> ・毎日のように授業の話が聞かされていた(9人) ・他の授業よりも熱心に取り組んでいた(2人) ・課外授業に費やす学習時間が心配だった(1人)	
授業成果の感想	<発表会に参加した感想> ・子どもが友だちと一緒に自ら考え、計画し、作りだすという良い体験ができた(15人) ・子どもにとって貴重な経験となった(6人) ・子どもが活き活きとしていた(6人) ・発表会に参加して感動した(4人) ・子どもたちの発想が素晴らしいと思った(4人) ・日向のまちづくりを学べたことは大変意義があったと思う(4人)	驚き・感動・納得
子どもの成長に関すること	<子どもが成長したと感じる点> ・自分から積極的に動いたり話しをするようになった(4人) ・下級生の面倒をよくみるようになった(2人) ・子どもと日向の街のことや夢について話すようになった(2人)	成長・信頼
	<子どもの今後について感じる点> ・仲間たちと一緒に挑戦したことは一生心に残る存在になったと思う(4人) ・子どもたちの将来に役立つと思う(2人)	

グおよび感想文に基づく、準備段階においては、教師側も終着点が見えないことや初めてプロデザイナーに接する不安感を持っていた。しかし、グループ案や模型作成の段階で、形をまとめる難しさ、加工する技術の未熟さを児童同士がカバーし合い、関係者がアドバイスを与えるプロセスの中で、常に児童と同じ目線に立ち、その苦労や悩みを共有し励ますことで、児童、教師、講師の一体感が生まれたことが示唆されている。また、授業の中で児童たちから感動を与えられ、教師として成長したと自己評価していることは興味深い⁹⁾。これらの変化の概要を図-11に示す。以下、他の関係者についても同様である。

(4) 地域および社会からの「活性化塾」の評価

(I) 講師および企画関係者からみた「活性化塾」の評価

講師および企画関係者は当初から、「活性化塾」を通じて児童の記憶や身体に残る体験をしてもらうために、一般的な見学・模型等の作成・発表だけに止まらず、実物を製作し、実際に使い方まで考えていくことを意図していた⁹⁾。不安感や技術の未熟さに挫折しそうになる児童たちに真剣に向き合いながらさらに才能を引き出し、各授業終了後に教師や関係者

とも議論を交わすことで連携を生み出していった講師の存在は、本授業において大きな牽引力であったと言える。

(II) 運営関係者からみた「活性化塾」の評価

本授業を運営する上で、側面から技術的支援や素材を提供した木材関係者や地元職方からのヒアリングおよび感想文からは、授業当初は、大きな期待を持たずに地元の木材の事を児童に知って貰えれば良く、一般的な「屋台」をイメージしていた⁹⁾。しかし、児童たちの描いた夢には、杉材の新たな可能性を豊かなものにする曲線や立体的な表現やまちづくりへ

応用できるバリアフリー等のヒントが散りばめられていたことに感動し、本授業の成功のポイントとして、児童、講師、教師、関係者が一丸となって妥協せずに、教育の場だけではなく、街なかで使用するというリアリティある「本物」を作ろうとしたことにあるとしている⁹⁾。

このように、授業を客観的立場で見守った関係者も児童たちと講師および担任教諭、協力者の信頼関係から創り出された授業について高く評価している。

(III) 社会からの「活性化塾」の評価

ステージ	各ステージにおける評価観点	児童の自己評価	保護者の評価	教師の評価	講師の評価	地域の評価	行政の評価	まちづくりプロセス
準備学習	・情報収集力 ・課題発見力 ・学び方	無関心・内面	授業への不安感 心配	不安感	不安感	知識の提供 お手伝い	企画提案	企画調査分析
		好奇心、予感、 体感、知識(街・杉)		子どもの変化 家庭内の話題	形にする 難しさ 技術不足	課題の 提示	技術の伝授	
デザイン案 模範制作	・課題設定力 ・問題解決力 ・アイデアを出そうとする力 ・考える力 ・発表力	講師とのふれあい、 夢の表現、才能の開 花、街への思いやり	子どもの変化 家庭内の話題		講師との 信頼感 一体感	児童たち との交流 教師との 信頼関係	アイデアの サポート	児童たちと 講師との橋 渡し
		協力、苦勞、 カタチにする技術		技術の伝授 7行7の サポート	基本設計 意見交換 合意形成 細部修正			
実物制作・ 発表企画	・感じる力 ・考える力 ・こだわり力 ・がんばる力 ・かかわる力 ・アイデアを出そうとする力 ・関心、意欲	満足感、自信、 こだわり	子どもの変化 家庭内の話題	児童・ 講師・教師 との一体感 夢の表現	技術の伝授 7行7の サポート	ワクワク感	一体感	実施設計 意見交換 合意形成
		プロの仕事、夢の実 現、仲間、作ったモノへの誇り、愛情		児童たちへ の追走	テーマの提示	要求に 応える職人 の技術	プロの技 術に感謝	
発表会	・情報発信力 ・主体的創造力 ・表現力、行動力 ・自己評価力	独創性、企画力、 夢の連携	子どもの変化 家庭内の話題	児童たちへ の追走	7行7の 具体化(設計)プロの 技術	愛着感 充実感	関係者へ の感謝 達成感	施工 イベント企画
		一体感、達成感、 感謝、満足		児童たちへ の感謝 貴重な経験 交流・絆	blog 交流	児童たちへ の感謝	記録作成 社会的評価	
実践(多目的利用)	持続のための PDCAサイクル適用 D・実践 ↓ C・評価 ↓ A・改善 ↓ P・計画	驚き 感動 納得	子どもの変化 家庭内の話題	児童たちへ の追走	関係者へ の感謝	児童たちへ の感謝 良い経験	事例報告	竣工式 イベント開催
		信頼関係 交流・再会 社会(街)への関心 新たな出会い		子ども の成長 への喜び と信頼感	記録作成 社会的 評価	まちづくり のヒント	交流の輪 の拡大	
		生活へのリアリティ の育成		次代への 教育継承	児童たちへ の追走	技術の応用	経験の伝達	
		街への 関心		街への 関心	セミナー報告 交流の輪 の拡大 経験の発 展的な 応用	交流の輪 の拡大	次回授業へ の展開	
								利活用 街使い 街育て メンテナンス

図-1 「日向市活性化塾」における学習プロセスの整理と多様な参画による情感共有の意識変化

「活性化塾」の一連の活動は、2005年「グッドデザイン賞(新領域デザイン部門)」を受賞した¹⁶⁾。その審査評価として、「デザイナーが主体となり、行政、企業、学校、市民が一体となって活動をしている教育プログラムであり、幼年教育を、敢えてローテク機器を用いて活性化させようという取り組みには、社会的な意義がある。何より、参加した誰もが元気になっている活動の成果そのものも評価できる」ことがあげられている。ここで「元気になっている」とは教育およびまちづくりの観点から評価を受けたことを意味しており、このことからまちづくり教育は一定の成果を得たと言えよう。このような事例は、現時点では唯一である。

5 考察とまとめ

本論文の内容をまとめると以下のとおりである。

(1) 教育の中にまちづくりを連携させることの有効性

児童からの感想文の分析から以下の点が考察できる。

1) 授業開始前は、主に自己の内部方向に目が向いていた。それが「活性化塾」の実施によって、2) 同級生に目が向き始めた(協力関係の大切さ)、3) 自分たちより年上の大人にも目が向いた(感謝の気持ち)、4) 年下の後輩(下級生に遊びを教える)に目が向いた、5) モノの素材や環境に目が向いた(自然やモノへの意識)、6) さらに授業終了後、街なかでの屋台の利活用やメンテナンス体験を通じて街に目が向いた(パブリックに対して意識し始めた)。

このような子どもたちの意識の変化(内面→外面: 他者→大人→年下→街: パブリック)が起きたことから、外部講師により地域素材をデザインする「活性化塾(まちづくり課外授業)」は教育方法としても有効と判断できる(図-1参照)。

また、本ケースの特徴は、a) 授業の基礎知識や環境を考えるための事前・準備学習(できればまちかど調査など野外授業により街の現状を知ることが望ましい)の実施、ついで、b) デザイン・設計、c) モノの製作・完成、d) 完成品のまちづくりへの利活用のプロセスを学習プログラムに組み込んだことであり、まちづくり学習におけるこのプロセスの有効性が示唆される。

(2) モノづくりを通じたまちづくりとの連携の可能性

まちづくり事業は、1) 企画立案・デザイン、2) 設計デザイン内容のディスカッション、3) 合意形成(デザイン決定)、4) 製作(施工)・完成、5) 利活用、6) メンテナンスからなる。今回「活性化塾」において子どもたちが体験したプロセスは、6)を除けば、まちづくり事業遂行のプロセスと同じである。子どもたちは、「活性化塾」の体験を通じて協力・思いやり・感謝などの気持ちを楽しみながら育んできた(図-1参照)。

このことは、参画型のまちづくりにおいて理論上の理解だけでなく、児童たち、保護者や地域住民が経験したようなまちづくりに関わることに楽しい情感を共有できるかどうか重要なポイントであることを示唆している。

(3) 教育への多様な参画のまちづくりへの有効性

「活性化塾」では、児童たちのみならず、専門家・教育者・木材関係者・行政・保護者および一般市民へと連携や協働の

輪を広げた展開が有効に働いた。

今回のまちづくり学習では、モノづくりという題材を通じて多様な参画が得られ、参画者が協力関係を築いたことが特徴である。この結果、児童のみならず多様な参画者が「まち」や「まちづくり」に意識を向け始めたことは評価されるべきであろう。

最後に今後の検討課題を以下に整理しておく。すなわち、総合学習時間を活用したまちづくり課外授業は、単発の教育事業として捉えるべきではなく、常にその授業とまちづくりや市民活動等とが連携し、相互作用的に循環・向上させていくプロセスが必要と考えられる。したがってこの目的を達成できるような企画意識や展開方法を、行政担当者や専門家は持続させていくことが望まれ、そのためのシステムも必要となろう。

また、今回の「活性化塾」は小学校児童を対象に実施したものであり、今後は中学、高校、大学教育の中で、まちづくりを考える教育プログラムを戦略的に継続することを考える必要もあると考える。

謝辞

講師を務めた南雲勝志氏、若杉浩一氏、千代田健一氏ほか関係者の方から資料提供などのご協力を得た。ここに、深く感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 日本建築学会編(2004), 「まちづくり学習」, 丸善。
- 2) 西村幸夫編(2007), 「まちづくり学」, 朝倉書店。
- 3) 梶島邦江・梅澤隆(1996年), 「子どものまちづくり学習教材としての「まちの謎解きブック」の有用性に関する研究」, 都市計画論文集, No. 28, pp. 163-168。
- 4) 三輪千夏・中川義英ほか(1998), 「子どものまちづくり学習」支援体制開発のための一考察」, 土木学会年次学術講演会講演概要集, No. 53, pp. 194-195。
- 5) 倉原宗孝(2001), 「子どもたちの体験的・持続的まちづくり活動の意義と評価」, 日本建築学会技術報告集, No. 12, pp. 199-504。
- 6) 高田光雄ほか編(2003), 「体験まちづくり学習」, 学芸出版社。
- 7) 篠部裕(2005), 「地域社会と連携した小学校でのまちづくり学習に関する研究」, 都市計画論文集, No. 43-3, pp. 499-204。
- 8) 宮崎県(2004), 「日向地区都市デザイン会議報告書」, 2005年3月, 宮崎県土木部日向土木事務所。
- 9) 宮崎県(2004), 「移動式夢空間-まちづくり授業取組みの軌跡-」, 2005年3月, 宮崎県土木部日向土木事務所。
- 10) 「日本全国スギダラケ倶楽部」, 「日向市活性化塾レポート, 2007年4月, <http://sugidarake.exblog.jp/m2004-10-01/>。
- 11) 「月刊「杉」WEB版」, 「12号特集日向・18号特集宮崎」, 2007年4月, <http://www.m-sugi.com/backnumber.htm>。
- 12) 内藤廣(2006), 「杉で何が出来るか-日向市での試み-」, 『林経協季報「和径」』, 2006年9月, No. 2, (社)日本林業経営者協会。
- 13) 内田みえほか(2005), 「杉とゆく懐かしい未来」, 『コンフォルト』, 2005年4月, No. 83, pp. 07-17, 建築資料研究社。
- 14) 児島邦宏ほか(2002), 「小学校総合的な学習の時間・評価の工夫と実際」, 教育出版。
- 15) 佐々木政雄(2006), 「まちのシンボルとしての駅舎・駅のあり方(日向市駅: 地域を生かした連立事業)」, 都市計画学会誌, Vol. 259, p. 42。
- 16) 「GOOD DESIGN AWARD 2005」, 「新領域デザイン部門」, 2007年4月, <http://www.g-mark.org/search/Detail?id=31872&lang=ja>。